

---

# 理想のタイプはお義父さま

江川 歩

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

理想のタイプはお義父さま

### 【Nコード】

N9257P

### 【作者名】

江川 歩

### 【あらすじ】

伯爵令嬢レベッカの初恋は5歳の時。大きくなったら、と約束した侯爵様と念願の結婚式！…の筈が、相手がちがうんですけれど！？どうということ？

## 1 プロローグ 伯爵令嬢の独白

突然ですが、皆さんは、理想のタイプを目の前にしたことはありますか？

私は、あります。

理想が服を着て、目の前を歩いて、喋ったら。  
あなたならどうします？

ちなみに私の場合。

お会いした途端に恋に落ち、即座にラブ アタックを開始しました。  
会ってその日に？ と眉をひそめるような悠長で無粋なことはなさ  
らないで欲しいのです。

だってぐずぐずしていたら、こんなにも素敵な方、すぐに誰かにさ  
らわれてしまう！ と必死だったんです。

なにしろ私の条件が不利でした。

私の不利な条件をお話する前に、素敵なあの方についてお話しさ  
せてください。

お名前はフロスト侯爵。

フロスト卿が父を訪ねていらつしやった時のことは今でも鮮明に覚  
えています。

穏やかな物腰、愛情深いお人柄、あたたかな手のひら。

私が一番心惹かれたのは、その瞳。

澄んだ青色の理知的な眼差し。けれども冷たい印象は受けず、むし  
ろ春の日の晴れ渡った空を思わせる。

そして、これが重要なのですが、ふとした瞬間に淋しげな陰がよぎ  
るのです。

これが、イイ！

決定打でしたスリーランホームランですランナーは

(1) 初恋

(2) ときめき

(3) プロポーズ！

ホームベースはゴールイン！ きゃあ！

……失礼しました。

我ながら淋しげなご様子に惹かれたのは早熟と言わざるを得ませんが、はつきりと、それとして自覚したのは最近だということ。

フロスト卿は、奥様を亡くしていらしたのです。ですから、よぎる陰は逢うことのかなわぬ奥様への思慕なのでしょう。

だからといって私が諦めるかつて？

答えは当然NOですよ！

どんなに難攻不落の城であっても、攻めなければ落ちる可能性だつてゼロのままなのです。富くじだとして買わねば当たらぬのと同じこと。

ならば私は攻めるのみ！

「こうしゃくさま、こうしゃくさま、わたくしをおよめさんにしてください！」

多少舌足らずになってしまったのはお許しいただきたい。

何せ初めてプロポーズした時は5歳だったのですから。

初恋、即求婚というノープランぶりは幼さゆえということにしておいてください。

ちなみにその時、侯爵様は30歳。  
今から思えばまだまだお若かった。

勿論今でも若々しくていらっしやいますけれどね！

ともあれ私の不利な条件、それは出会った時のこの年齢差。こればかりは努力でどうこうできるものではありません。

けれども人格者である侯爵様は、幼子の戯言として鼻で笑うようなことはなさいませんでした。

大きくてあたたかな手のひらを私の頭に乘せて、やさしくなでてください、

「ふふ、情熱的だね、レベツ力嬢。そんなに気に入ってくれたのかい？」

ふわりと微笑まれました。

「はい、ひとめぼれです。だいすきです！　ですからこうしゃくさま、わたくしがおおきくなるまでまっついていてくださいませんか？」

「そうだねえ。とても嬉しいお申し出だけれども、結婚となると私一人の考えで決めてしまえるものではないからね。息子にも聞いてみないと」

ああ！　そうですね、その通りです侯爵様！

侯爵様には亡くなった奥様の忘れ形見、ウィリアム様がいらっしやいますものね、結婚にご家族の賛同は必要ですよね。

私は隣りに立つウィリアム様のほうを向いて

「……ウィリアムさま？」

首を傾げて名前を呼ぶ。

ウィリアム様は、利発そうな少年でした。私と五つ違いだったはずですから、当時10歳でしょうか。侯爵様と良く似た色の瞳をこちらに向けてぼそりと

「……大きくなったら。」

と答えてくださいました。

！！ 難なくハードル突破です！

喜びに頬を染める私を微笑みながら見つめる侯爵様。

「分かったよ。ではレベル力嬢が大人になって、二人の気持ちが変わっていなかったら結婚しようね」

それはほんの口約束だったのかもしれませんが。

その場にいた私の両親など、全く本気にしていない様子でしたし。

けれどもあれから15年。私は負けませんでした！

好きだ好きだ意思表示をし続けて早幾年。まあ15年ですけど、長いかもしれません、これからの侯爵様とのハッピーライフを思えばなんてことのない年数です。そう！

こ・れ・か・ら・の！

ふふふふふ、ついに念願の花嫁なのですよ初恋が実るなんて私ものすごく幸せです今日は侯爵様と私の結婚式なんです。どうかあなたも祝ってください私もあなたの幸せを祈ります！

そう思っただけ毛氈の上を歩み、祭壇の前に立ち、誓いの口づけをするべくヴェールを上げられ目の前にある顔が。

どうしてウィリアム様！！？ ホワイ！

## 2 出会い

シリカ公国フロスト侯爵の嫡男、ウィリアムはさめた子供だった。

彼は早くに母親を亡くし片親で育ったが、淋しがって泣くようなこともなく、淡々と日々を過ごした。

だからといって冷淡な性格かといえば、そういうわけでもないように、

父親が亡き妻を想い涙するような時は傍にいて慰めたし、屋敷の敷地内に迷い込んだ動物などは率先してかわいがった。

ただ、特に愛情を注いでいるように見えるのが不細工な犬、というところが少々気になるころではあったが。

何事もそつなくこなし、淡泊な子供。

それがウィリアムに対する大人たちの見解だった。

そんなウィリアムが、サニー伯爵家を、父であるフロスト卿と共に訪れたのは10歳の時である。

母が好きだった珍しい花を、サニー家が育てているのだと聞いた父が、栽培方法や入手方法を聞くために約束をとりつけたのだ。花の名はブウゲンビリヤ。

南国の鮮やかな彩りは、北国であるシリカにおいては普通に見られるものではなく、サニー家でも特別に温室を設えて栽培していたのだ。

(……違う国に来たみたいだ)

案内された温室でウィリアムは思う。

想像していたよりもずっと規模が大きい。ウィリアムの知るブウゲンビリヤは上品な鉢に植えられた小振りな植物だったが、

目の前にある花々は天井に届くほどに生い茂る木の花だ。

色も、見たことのある鮮やかな朱色だけでなく、上品なぼかしの入った桃色、オレンジ色、わずかに薄荷色がかかった白など、

とりどりで、ウィリアムは思わず見入った。

そこに賑やかな気配がやってきた。

目をやると、タンポポ色の髪をした女性と小さな子供の二人連れ。

おそらくサニー伯爵夫人と息女であろうとあたりをつけて礼を取る。

「やあ、来たね。こちらへおいで」

サニー卿がにこやかに二人を呼び寄せる。

「フロスト卿、ウィリアム殿、紹介いたします。私の妻のメイベルと娘のレベッカです」

「はじめまして」「ようこそいらっしやいました」

ふんわりと笑う夫人と好奇心を隠すことなくこちらに興味を向ける子供。

「はじめまして、お目にかかれて光栄です。フロスト領を治めておりますトマス・リントンです。こちらが息子のウィリアム」

「はじめまして」

フロスト卿が応え、ウィリアムも再度礼を取った。



するとレベツカが、腕に抱えていたブウゲンビリヤ入りの籠をフロスト卿に差し出す。

「こうしゃくさま、たいせつなかつのだいすきなおはなだとききました。これをどうぞ！」

(……おや)

ウィリアムはたった今紹介された、小さな令嬢に注意を向ける。

(今、「たいせつなかつ」と言つたな、この子。「死んだ」とすぐに結びつくような言葉を選ばなかつた。

偶然か？ それとも、僕の母が他界したことを知らないとか？)

正直、侯爵はいまだに亡くなった妻を思い出してはすぐにめそめそするので、ありがたいことではあつた。

そつと観察をしていると、「おきれいなかつたとききました」と言っているから知つてはいるようだ。

こんなに小さな子が感心だな、などと思つてみると、侯爵が穏やかに微笑んでかがみ込み、レベツカの頭をなでた。

その瞬間のレベツカの表情。

ぱつ、と輝かんばかりの笑顔を浮かべ、明るい金髪も相まって、まるでそこに陽が射したような明るさになる。

(“サニー” って家名がこんなにぴったりな子もないんじゃないのかな)

ウィリアムは無表情なまま釘付けになつた。

（なんだろう。目が離せないような、ずっと見ていたいような）

そのまま見つめ続ける。

レベツカは笑顔に頬を染めるオプシオンも付けて侯爵を見つめた。

そうして

「こうしゃくさま、こうしゃくさま、わたくしをおよめさんにして  
ください！」

爆弾発言をかました。

（んなっ！？）

ウィリアムは目を見開く。10年間生きてきてこんな、心臓が跳ね  
上がるようなビックリは初めてだ（胸の痛む驚きにはもう慣れてい  
る）。

しかし日頃の無表情ぶりが功を奏して（？）か、彼が驚いているこ  
とを知るのは当人だけだった。

そんな彼の内心など知らぬレベツカは尚も言葉を続ける。

「ひとめぼれです、だいすきです！　ですからこうしゃくさま、わ  
たくしがおおきくなるまでまっついていてくださいませんか？」

なんとという短絡的かつ強引かつ無邪気な申し出か！

お前、僕より年下だろうとかこんな猪突猛進な母親を持つ羽目には  
絶対に陥りたくないとかそもそも彼女の両親はどうして止めない！  
？　とか。

珍しく心の中で次々にツツコミを入れるウィリアム。

「そうだねえ。とても嬉しいお申し出だけでも、結婚となると私

一人の考えで決めてしまえるものではないからね。  
息子にも聞いてみないと」

侯爵はのん気に答えている。が。

……これは。

(……レベツカ嬢。「誰の」が抜けている。この流れだと父は)

ウィリアムは父親の方に視線を向ける。目が合つてにんまりと微笑  
まれた。

いいんだよ分かつてる 的な。

間違つても自分が求婚されているなんて思つてもいない。  
そんなこととも知らない子供は無邪気にこちらを向いて

「……ウィリアムさま？」

首を傾げた。

(……!!)

ウィリアムの心臓が再度跳ね上がる。

なんだこれ！ かわいいな！ ちよつとこれ欲しいんだけど！ い  
やコレとか人に向かつて言つちやいけないけどでも首を傾げる角度  
とか一番可愛がつてる犬のチョンと一緒に！ たまんない！  
そうなると、ここは勘違いさせたまま様子を見た方がいいよね？

てなことを一瞬の内に頭の中を巡らせたウィリアム。

「……大きくなったら。」

主語も述語も省いてどうしてもとれる返答を口にしたのだった。

哀れレベッカ、君の未来は玉虫色だ！

### 3 印象

16歳のレベッカに、フロスト卿の息子に抱く印象は？ と聞いた  
としたら、

(1) 背が伸びた

(2) きらきらしてる

といった答えが返ってくるだろう。

少々、観察日記めいている。

ウィリアム本人が聞いたら、がつくりと肩を落としそうなものだが、  
実際には当人はそのような返答は予想済みだったし、わずかに片方  
の眉を上げるにとどまった。

さて、レベッカの回答の内容についてである。

1番目、背が伸びた。

これはまあ、読んで字のごとし。

十の頃に比べて背が伸びるのは当然だが、成長期に入りあつという  
間に父親の背丈を超したウィリアムをレベッカは内心、

(……見上げるのがたいへん)

と思っていた。

(それを思うと、表情がよく分かるから、お顔の位置が近い侯爵様  
は理想的ね！ 近頃、少しお肉がついていらしたところもイイわ)

和みます、ステキ！ 中肉中背万歳です！）

以下、いかにフロスト卿が素敵なのかを脳内で列挙しつつレベルカは悶えたが、長くなるので省略。

多分レベルカは、フロスト侯爵ならなんだってイイ。

2番目、きらきらしてる。

これは、「あなただけが煌めいて見えるの……」といった心情的なものではなく（それだったらレベルカにとって輝いて見えるのは、言うまでもなく父親のほうだ）、純粹に見たまま、配色の話である。頭髮が限りなく銀色に近い。短めに揃えられたプラチナブロンドが、歩く度にさらりと風をはらむ様は、巻き毛でからまりやすい髪質に手を焼くレベルカにすると、イラツとくるものであった。

（これって、もしかして白雪姫に嫉妬する王妃様の気持ち！？ いけないわ、そんな心の狭いことじゃあ！ ポジティブに褒めることを考えるのよレベルカ！ そうね、「年をとって白髪が出てきても目立たなくていいと思うわ」コレよ！）

言わない方がマシである。

また、彼が生まれ持った色彩の他に、このところ身につけている衣服の問題もあった。

近衛兵の制服が装飾過多なのだ。

ウィリアムは、父が貴族員の議長の職に就いていたし、王立学院での成績も優秀であったので、誰にも文官の道へ進むと思われていたが、

「内向きのことばかりをやっていると、人を陥れることを楽しみそ

うだからやめとく」

と、あっさり筋肉自慢の暑苦しい集団に就職した。  
この、進路決定の際の理由は、父であるフロスト侯爵の胸の内のみに留められている。

（相乗効果でキラッキラしてるのよねえ。あれで愛想が良ければもてるんでしょうに、浮いた話ひとつ聞かないし。大丈夫なのかしら）

余計なお世話なことを考えながら、レベツカが歩いていると前方に思い浮かべていた人物が見えた。

ちなみにここは、城の敷地内、修練場と王立図書館の間である。

「ウィリアム様！」

相手が一人であることを見て声をかけた。

立場的にレベツカから声をあげるのは好ましくない。

そう思っていつもはそつと手をふるのだが？？そしてウィリアムは必ずそれに気が付くのだが？？その行為が周囲にどう見られているのか、全く気付いていないレベツカである。

「レベツカ」

振り向いてにこりと微笑むと近付いてくる。

（きちんと笑えるのにな。人見知りなんだから）

「訓練は一区切りですか？ お疲れさまです」

言って見上げて異変を発見した。

「！！ ウィリアム様、頬に傷が」



## 4 夕陽

「ウィリアム様、頬に傷が」

レベツカが指摘するが、ウィリアムは、

「ああ、そういえば訓練中に切りましたね」

こともなげに言う。

「そんなことよりレベツカ、この週末の予定はどうなっていますか？  
学院はお休みですが、教授に手伝いを頼まれていたりは？」

もし空いているのなら、私もこの後、非番なんです。送りますから  
我が家にも立ち寄ってはいかがでしょう」

「ぜひ伺わせてくださいありがとうございます！！……じゃなく  
て！」

ん？ と、ウィリアムが眉を動かす動作で先を促す。

「その傷！ その様子だと手当なんてなさっていないでしょう、  
ああもう」

思わず手を伸ばすレベツカ。

ウィリアムは自然と屈み込んだ。

細い指が頬に触れる。

目を細めたウィリアムの表情を見て、

「やっぱり痛いんでしょう！」

憤然としてウィリアムの腕を取ると、ずんずんと引っ張って歩き出した。

「どこへ行くの？」

くすくすと笑い、問いかけるウィリアム。

相変わらず鈍い、と思いながら笑える自分はマゾヒズムに目覚めるんじゃないか、なんて考えながら。

「医務室です！ 何を笑っていらっしゃるんです？」

「いえ、私にも心配してくれる人がいるんだなあって」  
「……」

レベツカは、ウィリアムの返答を聞くと、へにやりと困惑した表情を見せた。

「それは……いるでしょう」

「いますか？」

実はレベツカの攻めどころはここなのだ。彼女は致命的に「淋しい人」に弱い。

「勿論です。います。たくさんいます。私もきちんと数に入れてください」

ふ、とウィリアムはやわらかく笑う。

「ええ、一番に」

「一番は侯爵様ですよ、お父様なんですから」

「……」

……つれない。

「さあ、行きましょうウィリアム様」

二人は、夕刻の傾きかけた陽の中を医務室に向かった。

(……紅く染まった彼女の頬が)

(夕陽のせいではなく、おれのせいなら良いのに)

## 5 揺れる箱の中で

二頭立ての馬車はフロスト邸に向かう。

揺れる箱の中でレベッカは。

????レベッカは、ウィリアムの膝の上にのせられていた。

いや、正しくは腿の上か。ウィリアムの腕はレベッカを囲い込み、しっかりとお腹の前で組まれている。

「……」

いつものことではあったが、最近レベッカは、これがちょっとおかしいのではないかと思い始めていた。

そもそも、始まりは子供の頃のことである。

レベッカとその両親、フロスト侯爵父子が馬車に同乗したことがあった。

その際に、レベッカは母親の膝の上にのせてもらっていたのだが、これを見たウィリアムが後日、二人きりの時に、

「羨ましい」

と、ぼつりと呟いたのである。

これを聞いて、

未来の母たる自分が頑張らずしてどうする！

レベッカは発奮した。

したが、いかんせん小さな子供ができることは限られているのである。継母への道は険しいのである。五歳の幼児が十歳の児童を膝の上にのせようというのは土台無理な話だった。悔しさに涙を浮かべるレベッカに、

「……そんなつもりじゃなかったんだけどな」

口元を覆った手の下で小さく呟くと、ウィリアムはレベッカを膝の上に抱え上げた。

「っ、わっ」

「お母様がしてくれるみたいにしてよかったの？」

「そう、そうなの、わたしはウィリアムさまのおかあさまになりたいんだから、できないとくやしいです」

身をよじってウィリアムの方に顔を向ける。涙がこぼれないように我慢をしているのか、下唇をぎゅっと噛みしめている。

「負けず嫌いなんだ？」

「きらい？ ウィリアムさまはわたくしがきらいになった？ おひざにだっこをできないから」

「はは、その嫌いじゃないよ」

ウィリアムは人差し指をレベッカの口元へ持っていき、噛みしめた唇をほのかせると、顔を近付け、コツンと額を合わせた。

「膝に抱っこは、体の大きい方が抱えたら良いんだよ。どちらが上でも下でもお母様の抱っこと同じ」

「そうなの？」

「そっだよ」

普段浮かべないような??いや、チョンに向かつては浮かべているかもしれない??笑みを浮かべてウィリアムは言い聞かせる。

「よかった」

明るい笑みが戻るレベツカ。

「じゃあ、さみしくない?」

聞かれてウィリアムは、ぎゅっとレベツカを抱きしめた。

「うん、ありがとう。これからも、こうしてくれたら淋しくないよ」  
「わかりました!」

ちよろい。

レベツカは、基本的に人を疑わない性格だった。それは今でも変わらない。

そんな訳で、少々疑問が頭をもたげてはいるものの、おとなしくウィリアムの膝におさまっているレベツカなのである。

ガタガタと馬車が揺れることに体も揺れる。そろそろ自分の体重のことなども気になるお年頃のレベツカは、居心地が悪そうに身じろぎした。

「あの、ウィリアム様」

「何ですか?」

「私、ウィリアム様の義母になる為の努力は惜しまないつもりでは

あるのですけれど」

ぐっ、と腹部に回された腕が締まった。地味に苦しい。  
大きな揺れもなかったのに何で？と首を傾げつつ、

「そろそろこの体勢は重くはありませんか？」

俯きがちに告げる。視線は先程きつくなつた、ウィリアムの腕だ。  
なんとかゆるめようと、ぐいぐいと押したり引つ張ったりするが、  
まるで解けない知恵の輪のように外れない。

きゅっ、と喉の奥を鳴らして見上げると、ようやく少しだけゆるんだ。

「何を言い出すかと思えば。貴女が重いなんてことがあると思いませんか？ こんなに細い腰回りで」

ぎゃー！！ なしなし、なしでしょう！ 自分の体を使って人のウエストサイズを測るのをやめーてー！

慌ててレベツカはウィリアムの腕を外そうとするが、今度はやわらかく抱き込まれ、肩口にウィリアムの額がのつた。  
レベツカの頬をさらりとした髪がくすぐる。

「私が淋しくなくなるまでは、ずっとこうしてくれると約束しましたよ」

びくり、とレベツカの肩が揺れる。

そんな言い回しだったっけ？

知らず眉がハの字に下がった。

（時々、ウィリアム様は子供みたいになるわね）

苦笑して、

「それじゃあ、私がほんとうにウィリアム様のお義母さまになれる  
までですね」

答えた。

なんだか馬車の中の気温が下がったような気がしたが、気のせいだ  
ろう。

陽が落ちると気温は下がるものなのだ。

フロスト邸への道のりは、まだ半分。



## 6 ペちりとぼよん

一番星が瞬き、薄闇が天を覆う。がたごと馬車は進む。

窓から見える空の色をレベツカが楽しんでいると、後ろのウイリアムが何やらごそごそしだした。

振り返ると、丁度、頬の手当てをはがそうとしているところ。

「何をなさってるんです。いけませんよ」

「いけなくありませんよ。手当てはとても！（ここ重要） 助かりましたが、これでは目立ち過ぎます。父に、からかいの種を与えるなどごめんです」

「侯爵様は、そんなことなさいません」

「貴女の前ではそうかもしれません」

「えっ、私の前では模範的な紳士でありたいと思っていらっしやるだなんてそんな！ 侯爵様なら多少の意地悪なお振る舞いだって受けてたてるように、女を磨きますのに！」

「（……イヤなスイッチ入っちゃったな） 多少、で済むと思っているんですか？ あれで随分な狸ですよ」

「それは忠告なんですか？ それともその手当てをはがしたいが為の方便？」

レベツカの手はウイリアムの手を阻んでいる。まっすぐな視線を向けられてウイリアムは苦笑した。

「……方便です」

ふっ、と息をつく。

「ですがお願いです。血もとくに止まっていますし、大げさにした

くない」

今度はレベッカがため息をついた。

「本当にそうなさりたいのなら、私がどうこう言うことではないのでしょう。でも知りませんよ？ 跡が残っても」

「残ったら嫌われてしまうかな」

「どなたに？」

「あなたに」

「まっ、ここで言うことを聞いてくれなかったからって、ずっと不満を引きずるほど私、心は狭くないつもりです！」

傷が残った容姿を嫌うのか、という質問の趣旨を、全く思いもしていない返答にウィリアムは淡く笑う。

「それでは、ここは我を通させてくださいね」

ぺちりとおでこを叩かれレベッカの了承と取る。

頬の傷を外気に晒したところで馬車はフロスト邸に到着した。

\*\*\*\*\*

広いホールで使用人たちに出迎えられた後、二人は応接室に落ち着いた。

程なくしてフロスト卿がやってくる。

「いらっしやいレベッカ。変わりはないかな？ お帰り、ウィリアム」

「侯爵様ー！」

飛びついて行きかねないレベッカを、すかさず捕まえるウィリアム。

「ただいま帰りました」

すぐ脇でレベッカのテンションは急上昇だ。

「侯爵様、侯爵様、二週間ぶりにお会いできて私とっても嬉しいです！ 私に変わりはありませんけれど、侯爵様は少ーしふつくらなさったではありませんか？」

すり抜けてフロスト卿のすぐ近くまで行ってしまった。

「おや、分かるかい？ 近頃、食事が美味しくてね。新しく屋敷に来た料理人が、とても腕が良いんだよ。あまり食べ過ぎると、薬学も勉強中のレベッカにはおこられてしまうかな」

「おこるだなんて、そんな！ 美味しく食事ができるのは良いことですわ。過ぎた量でないのなら、むしろぼっちゃりなさるのも素敵です」

ぼつ、と頬を赤らめるレベッカ。

「それで、あの、侯爵様。もしお許しただけでしたら、お腹に触れさせてはいただけませんかしら」

ぶつ、と吹き出したのは父子同時だったが、意味合いはそれぞれ異なった。

侯爵は笑いをこらえながら、

「どうぞ」

と、許可を出した。

?????ぽよん。

上質な衣服の下の贅肉が揺れる。

「きゃあ、出始めのお腹ですね、気持ち良いです!」

「そうかい? これを褒められるとは思わなかったから照れるなあ  
ハハハ」

……何だろうこの、お花の飛んできそうな会話は。

ウィリアムはそつとこめかみを押さえた。

花といっても、薔薇や百合ではない。

頭の上に咲くチューリップだ。

(……羨ましくなんてないんだからな)

どごそのシンデレレのようなことを、ひとりごちる。

?????たとえ羨ましかったとしても、ウィリアムの性格では無理な会話だった。

## 閑話 酒場にて

「直接触らせていただいたら、しつとりぺとぺとするんですかしら……」

フロスト卿と二人で、きゃっきやと戯れた挙げ句に、聞きようによっては際どい発言をする令嬢。ぼうつとなつて呟くレベルカに向かつて、

「老人は水分が抜けてくるから、カサカサしてますよ」

憎まれ口をたたき、すっかりヘソを曲げられたウイリアムである。おかげで、一人で帰る！ と送らせてもらえず（勿論、使用人は付けた）、今は悪友を呼び出して街の酒場でくだを巻いている。

「代わりになりそうなところといえば臀部か……」

目が据わっている。悪い酒だ。友人は思いつきり眉をしかめた。

「……やめるよ？ ほんつとにやめるよ！？ 無念かもしれないが、お前の体のどこにも中年男性の腹の感触に相当する部位はないからな！？」

「なぜそんなことが言い切れる！？ 試してみなければ分からないだろう！」

「誰がどうやって試すんだ！ 落ち着け！ その、とりあえずやってみよう な考え方、所属組織に毒されてきたんじゃないのか！？」

ちなみに近衛隊で一番良く使われている掛け声は、「ジークマッスル！」である。

神殿に仕えるこの友人にとっては理解し難い団体であった。

「ほら、押してダメなら引いてみる、って言うじゃないか。お前も少しは引いてみたら？」

「それは相手が押されていることに気付いていなければ意味がないんじゃないのか」

「あ、そっか」

あつさり頷かれるのも癪に触るが、事実なので仕方がない。

「……見てろよ」

「ウイリアムウイリアム、それ負けフラグだから」

「旗は倒すためにある。その内お前にも協力してもらうからな」

「何をですかー！」

ぎゃあ、と慌てる声も喧噪に飲み込まれ、夜は更けてゆく。  
転がる酒瓶の数はまだまだ増えそうだった。

## 7 八角形の砦

大陸の北に位置するシリカ公国の城は、二つの砦に囲まれている。  
一の砦の内側にそびえるのは城。

ここで王族が暮らし、貴族院が開かれる。

一の砦を中心にして、幾回りか大きく囲んでいるのが二の砦。

この区域に、王立の図書館や学院、練兵場など主要な施設が建ち並び。ここを51区域と呼ぶ。

砦は正八角形を描いており、儀式や呪術めいたものを思わせるが、これは砦を築いた4代前の城主が、伝説の大ダコに並々ならぬ執心を示していたことに由来する。

曰く、

「膨らんだ大ダコが飛来して、砦ごと上空へ連れて行ってくれるぞ！」

タコの足1本につき、引つ掛ける為の角がひとつらしい。家臣たちは内心、

（……例えばタコが砦に足を掛けて、上空に浮き上がったとしてだ。持ち上がるのは、砦だけじゃね？）

と、思ったが、これ以外の面では文句のない王だったので曖昧な笑顔でスルーした。砦はあるに越したことはなかったからだ。

王が心待ちにする大ダコ???「灰色さん」と彼は呼んでいたが???は、今も一向に訪れる気配はない。

さて、この砦の中にある王立学院に現在、籍を置いているレベッ

力である。

王立というだけあって、優秀な人材が集まる学府は入学の競争率も高かったけれど、将来、侯爵の手伝いができたら、

「惚れ直してしまったよミスウィート」

「ダーリンの為なら、このくらい屁のカツパよ」

……というような、めくるめく甘いひと時が訪れるのではないかと夢想して頑張った。

レベルカの脳内では、しょっちゅうこのような妄想小芝居が繰り広げられているが、なかなか実現しないのが悩みの種だ。

ちなみに、貴族の子女が「屁のカツパ」などという言い回しを口にするのはあまり、いや、まずないことだが、学院は実力主義であり、貴族の令嬢などはほとんど在籍していないことから、段々と今までにない語彙が増えた。

ふわふわとお陽さま色の髪を揺らし、春の妖精のようだと囁かれる容姿で「屁のカツパ」。

シニールである。

ただでさえ女子の少ない学院なのに、男子の夢を壊さないで欲しい……、とは級友たちの弁である。

ともあれ、学院内では相手为谁であろうと、過剰な装飾を施した言葉遣いはしない。そんな暗黙の了解があるのは事実だ。

「……ご自分の講義はどうなさったんですか？ ヒューバート殿下」  
「やだな、レベルカ。殿下はなしで、ってお願いしたよね？」

？？それが、この場合当てはまるのか。

教室で隣りに陣取り、満面の笑みを浮かべる相手に困惑中のレベルカである。

につこりなのかにんまりなのか、口を弓形にして身を乗り出してき



た。

「ヒューって呼んで？」

## 8 ばっちゃん

そんなこと言われても。

自分のことを愛称で呼べ、と自分の真横でにこやかにねだる青年に  
対して、レベツカは心中で異を唱えた。

彼の名は、ヒューバート・エンファシスⅡシリカ。

この国の第一王子である。

王立学院の最終学年に籍を置き、成績も優秀、名君の素質ありと評判の王子。

??の、筈、なのだが。

少し前から、この王子が妙にレベツカに構うのだ。訳が分からない。  
今も、たれ目がちの甘い目元をゆるませながら、

ばっちゃん

……音が出そうなウインクを寄越した。フェロモンだだ漏れ。周囲  
でさわさわと声があがる。

「シリカのセクスイープリンスがご降臨なさったぞ！」

「オレもあやかriteえー！」

「キヤーツ、プリンスーウ！ 抱いてーッ」

やかましい。

君たちは今が授業中だと分かっているのかな？  
年若い教授はため息をつく。

一方、レベツカはいえ、

（これも何か私の知らない作法だったりする？）

最近まで手のひらを上に向けてくいと指を曲げる仕草の意味も知らなかったほどである。首を傾げて、

ぱっちん。

ウィンクを返した。

ヒューバートは、目をぱちくりと瞬かせた後、片手で顔を覆ってしまった。

「うわっ、やるなあレベルッカ嬢！」

「セクスイーフェロモン効いてねー！　っっーか王子撃沈？」

「伊達にリントン先輩の胸焼けしそうなラブ　ビームを浴び慣れてねーな！」

「てことは、ラブ　ビーム　>　セクスイーフェロモン？　うおお

ウィリアム先輩すげえっス、オレ先輩について行くー！」

ひそひそ。

もう、さあ。君たちさあ。

教授は肩を落とす。「僕は授業がしたいなあ……」

「教授」

通る声が壇上の人物を呼ぶ。

「サニー嬢をお借りしても？」

「はい、どうぞ殿下」

「待ってください先生！　今は授業中ですよ？　それに殿下」

「ヒュー」

「……ヒュー先輩。私を連れて行ってどうなさるんですか」  
「実験の助手をお願いしようと思って」

それを聞いた途端に、レベツカの目が輝く。植物を医学的に有効に利用するためのヒューバートの研究は、レベツカが今後進みたい道でもあったので。ちなみに、新しい薬効を発見して、権利料をフロスト侯爵に使ってもらうのが彼女の数多ある夢の内のひとつだ。意外なことに、いつもの妄想小芝居よりは実現性は高い。  
結局、王子の後について教室を出た。

\*\*\*\*\*

二人は石畳の回廊を歩く。

「授業を抜けたこと、フロスト侯爵様に伝わったりしませんよね？」  
「口止めしとくよ」

ヒューバートは、レベツカが恋人の親の心証まで気にかけるほど、ウィリアムとの仲は進んでいるのか、と考えた。

（征服しがいがありそうだ）

## 8・5 王子の思惑

吾輩は王子である。名前はまだない。

……冗談だ。先日読んだ、東洋の小説を気取ってみた。  
実際には、ヒューバート・エンファシスⅡシリカという。

「薔薇の似合うチャーミングなあなた」って呼んでくれても良いよ？  
なんだいその溜め息は。ハハハ、私に見惚れたんだね、光栄だ。

というような芸風で日々を過ごしている。

最初は冗談のつもりだったのが、最近は板に付き過ぎて自分でも違和感がない。元々持っていた素質なのかもしれない。

そして、この振る舞いで、随分と生きやすくなった。

自分が人よりも多少出来が良いのは自覚しているが、それを良く思わない者もいる。まあ、そんな奴は早晚失脚させてやるつもりではあるが、現時点での私の手駒はあまりにも少ない。

そんな中で、ぜひとも手に入れたいと思う人材があった。

貴族院の狸の一粒種、ウイリアム・リントン。

学院で一学年上に在籍していたので、能力や人柄、周囲からの評価も分かっていたし、自分と年齢が近いのも都合が良いと思った。

だから、誘ったのだ。

将来、私の補佐となることを見据えた進路を選んでほくれないかと。

つまりは政務に携わる部署で力を付けて欲しいという意味だったのだが、それをあいつは！

「興味がないので」

の、ひと言で断りやがった！  
温度のない表情で、しれっと！

「君主制のこの国において、その言葉は随分と勇気があるんじゃないか？」

言つてやると、奴はヒョイ、と眉を上げ、

「ああ、申し訳ありません。言葉が足りませんでした。正確には、陰謀の渦中に身を置いて権謀術数を喜々として張り巡らす、そういった自分に興味がありません」

少しも申し訳なくなんて思っていない表情で言い直した。  
言葉数は増えたが、ちつとも謝意は増えてねー。

「それなら何に興味があるというんだ？」

その時のリントンの表情の変化には驚いた。  
色も温度も乏しい「ひんやり」を絵に描いたような顔に、やわらかな色がのる。「雪解けだー、春が来たぞー！」という空耳が聞こえたくらいだ。

しかし、そこまでの変化を見せておきながら、

「秘密です」

奴は教えなかった。

秘密と答えた時の、ひどく甘ったるい表情と声。  
何が奴をこつちも変え得るのか。

気になって当然だろう？

リントンの卒業した翌年、王立学院に入学してきた少女に興味を湧いたのは、そうだった理由だ。

## 9 グラスガーデン

サニー家の令嬢レベッカは温室育ち。

「って言われているのは知っている？」

そう問い掛けながら、ヒューバートは研究室の扉を開けた。眼前には実験器具で森ができています。

合間を縫って窓際に近い机まで行き、上着を脱いで白衣を着用する。その際、シャツの前をはだけるのはお約束だ。

「我が家の温室は一応、規模が大きな部類に入りますからね。温室の中で遊んだり、勉強したりもしましたから」

「うーん、それってちょっと違うんじゃないかな？」

「大切に育ててもらってますよ？」

予備の白衣を受け取りながら、レベッカはにこりと微笑む。

（……言葉の中の揶揄を分かってない、わけではないのかな？）

掴みかねたが、この部屋に同行させた口実を思い出してヒューバートは実験の手順の説明をはじめた。

一方その頃。

「アニキー！」



ウィリアムは覚えのない呼ばれ方で呼び止められていた。振り返り、近付いてくる人物の服装を見て、かすかに眉を寄せる。

「……君は、王立学院の一年生のようだけれど」

「ハイ、仰言る通り、王立学院一年在籍、スミスです！上から読んでも下から読んでもスミス、とお見知りおきください」

「すぐくどうでもいいことを付け足したね、君」

「うわあ、ひんやり視線がたまりません先輩！」

「変な性癖を私に示してくれなくていいんだからねスミス君」

「うっはあ凍れます！ サニー嬢への態度との温度差に悶えそう！」

「レベツカ？」

ウィリアムの態度が改まる。

聞き流す姿勢から一転して真剣に身を乗り出した。

「レベツカに何か？」

「あ、そうです、そうなんです。今、講義中のサニー嬢をヒューバート殿下が研究室へ連れて行かれたんです。王族の研究室って、共同じゃなくて個室でしょう？だから」

「！……それをわざわざ私に伝える意味は？」

見返りを求めているのか、と言外に含ませて尋ねる。

返ってきた答えは思ってもみないものだった。

「アニキって呼ばせてもらいたいんです！」

「……は？」

そういえば先程もそんな呼ばれ方をしたが。

「色々と斜め上をいく、あのサニー嬢を射止めるリントン先輩って

すごい！　って僕達懂れているんです。　っていつか尊敬？　リスベクト？」

「僕”たち”？」

「ファンクラブ？　親衛隊的な……違いますね、そうだ、舎弟です！」

【舎弟】人に対して自分の弟をいう語。他人の弟にもいう。（広辞苑）

『……お兄さまって呼んでもいいですか？』

あらぬ幻聴が脳裏をよぎってウィリアムはゾツ、とした、が、  
使える者は使うべし。

一時の背中の寒気がどうした！  
いつとき

「呼び名くらい好きにしたらいい。教えてくれてありがとう。……  
ところで君こそ今は講義中なのでは？」

「トイレに行きたいって言って抜けてきました！」

びしっ！敬礼！

屈託のない返事に、ウィリアムはこの後の自分の隊長への言い訳は、  
絶対に腹具合だけは使うまい、と心に決めて踵きびすを返した。

王子と対峙するならば、少々時間をとるだろうと思ったので。

学院の研究棟に足を踏み入れる。  
たしか王子の研究室は3階の奥だ。研究棟独特の静けさの中、足早  
に目的階へと進む。その時、

かしゅん。

遠くで、何かが落ちる音と「きゃあ」という声が聞こえた。

（レベツカ！？）

ウィリアムは階段を駆け上がり、廊下の突き当たり、開け放たれた扉を目指した。

木目の美しい扉に手をついて中を見渡す。

「レベツカ！」

視線の先には、こちらに背を向けて床にうずくまるレベツカと、その対面にはひざまずいたヒューバート。

ウィリアムは咄嗟に近付くと、レベツカを抱え上げた。

振り返る余裕もなく、背後の人物にもたれ掛かる姿勢になったレベツカは身をよじり仰ぎ見て、

「ウィリアム様」

ふわりと微笑んだ。

しかし、すぐに顔をしかめ、ウィリアムの喉元に手を伸ばすと、

「釦が外れていらっしやいますよ」

襟元の乱れを正した。

それを見て、胸元まで見えそうなほど襟をくつろがせているヒューバートは目をくりとさせた。

「レベツカ、私の釦は直してくれないの？」

にんまりと微笑みながら言った。ウィリアムの眉間に皺が寄る。

「殿下、そのようなことをさせる為にレベッカを連れ出したのではないでしょう？」

「ん、そうだね」

あっさり引き下がる。

「まずはガラスを片付けないとね」

「そうでした！ 申し訳ありません、器具を割ってしまっ

た。レベッカの視線をたどると、足下に壊れた実験器具が散っていた。先程の音と悲鳴はこれらしい。

ウィリアムは表情を引き締める。

「殿下にお怪我はございませんか？」

「ないよ。割れた時に近くに居たのはレベッカだけだからね」

「レベッカ、君は？」

「大丈夫よ」

くすりとヒューバートの口から笑みが漏れる。

（こういう時の順番は間違わないんだな。）

サニー嬢への執着を隠そうとはしないが、いざという時には王族である自分を優先させる。

そうあるうとするウィリアムの姿勢にヒューバートは好感を持った。

## 10 あなたも

ガラス片の始末をする為にレベッカが退出している間、部屋はウィリアムとヒューバートの二人きりになった。

「思ったより早かったな」

「まさか私を呼び出す為にレベッカを利用したのではないでしょうね？」

掌中の珠に触れるなとばかりにウィリアムは気を尖らせる。

ヒューバートは苦笑する。

「利用……なのかな。自分が振られた理由を知りたいと思ったら、予想外に興味深い人物だったんだよ」

「紛らわしい言い方をなさらないでくださいませんか。彼女が聞いたら盛大に誤か、」

「ウィリアム様、殿下に想いを寄せられていらっしやったんですか！？」

あー…

遅かった。レベッカの耳に入ってしまった。しかも、

「そうだよレベッカ、リントンに側にいて欲しいと懇願したのに、すげなく断られたんだ」

ヒューバートが混ぜっ返す。

またレベッカ呼びか、と、ウィリアムはムツとする。たぶん一番に

気にすべきはそこじゃない。  
レベツカは、

「道ならぬ恋はお辛かったですね」

ヒューバートの手を取っていた。

「レベツカ！」

べり、と音が聞こえそうな勢いでウィリアムはレベツカを引き剥がす。

「愛されている者の余裕かい？」

ヒューバートが皮肉気に口の端を歪めると、レベツカはきょとんと目を瞬いた。

「私のことを仰言っているのですしたら、余裕などどこにもありません。どんなに全力でお愛し申し上げたところで、一番にはなれないのですから」

「何だつて！？ そんな罪作りな真似を君は許すのか？」

「許すも許さないも、ひ、ひと目惚れした時点で、きや、言ってしまいました、すでに心の中に大切な方を住まわせていらっしやるのは承知しておりましたもの」

照れますー！

と、頬に手を添えて身悶える令嬢の様子は、言っている内容は高潔かもしれないが、いかんせん見たところが残念だった。

とにかく落ち着きがない。だから実験器具を割るような事態に陥るのだ。

フロスト侯爵への愛を語り出すとヒートアップするレベツカをよく知っているウイリアムは、ボロが出ない内に、とレベツカの口を手で塞いだ。

「フガ！」

「おいリントン、都合の悪いことは口を塞ぐのか」  
「何とでも」

（殿下の言う”都合の悪いこと”は、おれがレベツカを差し置いて想う人を持っているという解釈だろうけれど）

実際には、レベツカが想いを寄せるのが自分の父親であること。それが知れ渡るのがウイリアムにとっては都合が悪い。

幸か不幸かどういいうわけだが、それは世間に認知されぬままであるけれど。

（親子ほど年の離れた相手への想いなど、ままごと扱いか、良くて憧憬と認識されるだろう）

ウイリアムはそう考えている。そして、そうなった場合にレベツカに群がる虫の数が増えるのは避けたかった。

何故なら、

（まだおれは手に入れられていない）

レベツカが知ったら憤慨しそうなことを考えている。ウイリアムは自嘲の笑いを漏らした。

レベツカは物ではない。

今、自分の右の手の平に息づかいを感じる、生きて考える少女だ。けれども考えずにはいられない。

（おれは手に入らないからムキになっているだけではないのか？）  
（手に入ったら興味をなくしたりはしないか？）

今まで幾度も自問したが、答えは出なかった。この先もまだしばらくは出そうにない。癪だけれど。  
それもこれも、

（クソジジイのせいだ！）

レベッカがトマス・リントンに熱を上げたまま、下げる気配を見せないから。

そのことについて考え始めると、むかつ腹が立ってくる。

あれが10年も想い続ける相手か？

いや、親だけど！ 尊敬はしているが！ 愛情も勿論持っているが！

（少しは周りも見てみたらどうなんだレベッカ！）

……………オマエモナー。



## 11 知らない

こぼこぼと音を立てる蒸留装置の向こうで、レベッカとヒューバートが何かの植物の薬効と副作用について話している。

ウイリアムも学院で一般教養としての薬学は学んでいたが、今、目の前で交わされる会話については理解しかねた。

そう、レベッカにはそれだけの知識が既に身についているのだ。おそらくは、独学によって。

素っ頓狂で思い込みが激しく、世間知らずの気はあるが、彼女には向上心とそれに見合う能力があるとウイリアムは思っている。

あまりそう見えないのではあるけれど。

それが主に自分の父に対する想いを原動力にしているのが悔しくはあるけれど。

そして、ふと考える。

レベッカの想いは足し算の想いだ。

相手を想う気持ちで己の能力を高め、そして豊かにしていく。

比べて自分はどうかだろうか。

欠点の芽を削り、嫌われないようにする引き算の想い。

例えば、進路を近衛隊にとったこととか。

そこまで考えてウイリアムは、うわ、と口元を覆って目を伏せた。

直前にヒューバートに対して放った言葉を思い出したのだ。

（おれがどれだけのものだって言うんだ！？）

ちょっと誘われたくらいで、本気で執着されるほど大した人物でもないだろう、と思うと顔が熱くなるような気がした。

ちなみに、「ちょっと」誘われたと言っているが、これはウイリアムの主観による「ちょっと」であって、彼がレベッカに向ける想いの発露も「ちょっと」だ。投げても返ってこない想いのボールはウ

イリアムの感覚を鈍らせていた。  
それはさておき。

挙動不審なウイリアムの様子にいち早く気付いたのはレベッカであった。

「ウイリアム様？」

とと、と軽い足音と共に近寄り、下からのぞき込むように見上げると、そつとウイリアムの腕に手をかける。

「ご様子が変わですよ？ 具合でも悪いのではないですか？」

「ん？どうしたリントン、顔が赤いぞ」

言われてウイリアムは苦笑する。

「分かるほど赤くなっていますか」

そうして、腕にかけられたレベッカの細い指をそつと外すと、両手でレベッカの耳を覆って塞いだ。

「ひゃえっ？」

なんだか変な声を発しているレベッカに、淡く笑いかけてからヒューバートに顔を向けると、

「先程の自分が、絵に描いたような ” 自信過剰な青二才 ” だったので恥ずかしくなっただんです」

苦い笑いを重ねた。

それを聞いて首を傾げるヒューバート。

（ああ、殿下も首を傾げる角度がチョンと一緒に）

せめてレベッカと一緒にだと言ってやれウィリアム。

「何を成したでもない、小器用なだけの自分が貴方に求められて当然という態度でいたので」

その言葉に、ヒューバートは傾けていた頭をまっすぐに直すと今度は半眼になってウィリアムを見据えた。

「ウィリアム・リントン」

「はい」

「私の本気を疑ってもらったら困るよ」

「……」

「私が欲しいのはく今＞完璧な人間ではないよ。＜共に＞より良き道を探せる人間だ。そこを誤解しないで欲しい」

直截な言葉にウィリアムは軽く目を見張る。

「……殿下は」

「うん？」

「殿下なんですねぇ」

へにやり、という音でも聞こえてきそうに表情を崩すウィリアムに、

「なんだいそれは」

ヒューバートは返した。  
返したが、心の中では

（なっ、なんだこれ！ 何この表情の動きっぷり！？ 見たことないんだけど！？）

大慌てだった。

こんなリントンは知らない。知らないリントンを引き出したのはレベッカだろう。

彼女はまるで触媒のようだと思った。

その存在で反応を引き出す。

そしてウィリアムも知らなかった。

耳を塞がれたレベッカが、会話を聞かないように気を付けながらも向き合った状態のウィリアムの表情だけはじっと見つめていたことを。

またレベッカも知らなかった。

目の前のウィリアムの表情にいつもと違うものを感じた、その先にある気持ちを。

それは取り繕わないウィリアムの弱さを垣間見た瞬間だったのだが、違和感の原因も、意味も、その時のレベッカには分からなかった。

## 幕間 ほろりと甘い

「女の子っていうのは、どうしてもあも甘いものが好きなんだろうねえ？」

手のひらの上の小さなお菓子を見ながらヒューバートは言う。

ここは学院棟ではなく、一の砦の内側、王城の中の一室である。

答えを求めているのか独り言なのか判別のつきにくい言葉ではあったが、一応同じテーブルについていることだし、と、それを聞いた男は口を開いた。

「気を散らしていないでさっさとソレに目を通しなさい」

ヒューバートの発言への返事にはなっていない。

ちなみにソレとはテーブルの上に積まれた書類である。

実務で政治的感覚は身に付けろ、とヒューバートの教育係の一人であり叔父であり文官である男が本日持ってきたものだ。

銀縁の眼鏡はスパルタの似合いそうないかにも厳格な容貌だが、この男が以前は随分と浮き名を流していたことをヒューバートは知っている。

「甘いものばかり食べているから、本人も甘いんだろうか」

そしてこちらにも、まったく返事にはなっていないのであった。

果たして二人に会話する気はあるのかどうか。

これは少し相手をしないと、身を入れて仕事をしそうにないな、と判じた男は小さくため息をつく。

「その菓子を寄越した女性が甘いということか？　あまり大っぴら

に口にしていると醜聞になるぞ」

「へ？」

ぽかん、と口を開け間の抜けた声を発した後でヒューバートはにやりと笑う。

「さすがですね叔父さん、発想がエロい」

「ヒューバート、普通くさすが>とくエロい>は結びつかない」

突っ込みどころはソコなんだ！ と笑うヒューバートを冷やかに眺めやると、すぐに笑いをおさめてこちらを見る。

「そこまで艶のあるく甘い>じゃないよ。それに、醜聞になるような類の女性がこんなお菓子を持ち歩くと思う？」

そう言つて、かわいらしく包まれた小さなお菓子をつまみ上げて見せた。

「お前、幼女趣味はもつと悪いぞ！」

「……叔父さんの中で私はどういう人間なの……」

「冗談だ」

「……（ほんとな……）」

「で？」

「で、って！」

ヒューバートは笑う。

「学院の女の子におすそ分けでもらったんだよ。三つ持っていて、叔父さんにこれからしばらくられる、って言ったら二つくれた。だからハイ、一つは叔父さんの分」

研究室でのやりとりの後、その場を辞するウィリアムにレベッカが渡したお菓子だ。一体どこに隠し持っているのかと感心したのは秘密だ。

茶化すつもりで自分にもくれないのか、と口にしたら二つくれた。

叔父の件は同情をひくというポーズのためだったのだが。自分の分を残そうという気は彼女にはなかったらしい。

思い出してヒューバートの口はやわらかな笑みをかたちどる。

それを見て男はひよい、と眉を上げた。その拍子に眼鏡が下がり、中指で押し上げる。

「恋人か？」

「まさか。ほかに相手がいる子だよ」

「人のものは良く見えるものだが」

「ハハ。……ああ、そういうところはあるかもしれない」

「ヒュー？」

「ん？」

ぱくり、と包み紙からお菓子を取り出し口に放り込みながらヒューバートは答える。

「（自覚なしか？）いや、なんでもない　これ、あまり見ない菓子だな」

「南方で穫れる巴旦杏の粉を焼いたものだってよ。プラネタ王国の特産だって言ってた」

「ほう、そんなバックグラウンドまで理解するような子なのか」

「学院に入学するような子だよ、叔父さん。それにプラネタとは親交の深い家なんだと思うよ。南国の植物を好むので有名な家だから」「サニー家か！」

「ご名答。だからね、私の恋人だなんてありえないよ」  
「ああ……なるほど」

サニー家の令嬢が、正式ではないにしろフロスト卿の子息と将来の約束を交わしているというのは一部高官たちの間では有名な話なのだ。

男としては、正式な話でもあるまいし奪ってしまえばいいだけのことではないかという考えではあったが（例え正式な話であっても奪うのが楽しいというのが正直なところだ）、口は噤んでおくことにした。

代わりに、会話に出てきた国名に話題を移す。

「プラネタといえば、来月使者が来るぞ。ほら、丁度そこにのぞいている書類に日程が」

「へえ、そうなの。やっぱり南国の人は真冬には来ないんだねえ」

「余計なことを言っていないで、ほら」

「ちよつと待つて、お茶の一口くらい飲ませてよ！　このお菓子、結構口の中の水分を持つてく……」

仕方がないな、と男は人呼んで茶の用意をさせる。

もらった菓子を自分も口にすると、ほろりと口の中で甘くとけた。

この味をヒューバートは、ただ甘さだけを味わったのか、それとも何か他のものも味わったのか。

そんなことを考えながら男はカップを手を取った。



**幕間 ほろりと甘い（後書き）**

お菓子はアーモンドプードルのスノーボールです。  
南国の、雪への憧れ。（作中で）

## 12 赤い髪の麗人

スペインの雨は主に荒野に降る。

そんな言い回しと同じカテゴリにある文章に、

シリカ公国はとても平和である。

というものがある。

どこがどのように発音の練習になるのかというと、

「シリカスイリツカシルイカスイリカ」

という舌をかなり巻き舌を試してみたりな読み方にあるのだけれど

ごめんなさい嘘をつきました。

ほらふき男爵のヨタ話はさておき、シリカ公国が平和であることは事実。

そして平和な状態は、何故だか噂話に栄養を与えやすいようで。只今あちらこちらで噂のお花を咲かせているところ。

例えば王立学院の一画では …

「聞いたか？」

「聞いた！ オレは美人のチェックは怠らないんだぜ！」

「プラネタ王国の使者様のことよね！ 燃えるような赤い髪に凜とした佇まい、女性だけときめいちゃうわー！」

「ちょ、おま、オレというものがありながら」

「たいへんだ、今おれたちは一つのカップルの終焉を見ようとしている……」

「うるせえ！」

横滑りな会話を繰り広げる面々がいたけれど、要は友好国であるプラネタ王国から来ている使者が注目の的になっているのであった。それを、ほわわん、といった態度で聞いているのはレベッカ。

図書館へ本を返しに行く途中で学友たちに呼び止められ、話を聞かされている。

普段、ちょこまかと動き回っているレベッカをわざわざ引き込んでまで噂話を繰り広げるようなことはしないのに、なぜなのかしら？と、レベッカが首を傾げていると。

「それでねレベッカ嬢、足を止めてもらったのは君に聞きたいことがあったからなんだ」

「そうなの、もしできたら、なんだけど」

少しモジモジしながら学友たちが切り出した。

「聞きたいこと、ですか？」

一体何を聞きたいのだろう？

「うん、使者様のことなんだけどね」

「使者様の」

「そう」

「なぜ私に？ 何か私で答えられることなんてあったかしら あ

！ 私の家がプラネタの商家と取引をしているからですか？ でも、うちは商業的な関わりがあるだけですから外交のことや、まして使者様個人のことは分かりませんけれど……」

「うん、でもね。リントン先輩が」

「？ ウイリアム様に関係するんですか？」

確かにウィリアム様のお母様のご出身はプラネタだったけれども、それと今回の使者様と関係あるのだろうか？

「あれっ？ 聞いてないの？」

「????」

もはやレベッカには何が何やらさっぱりだ。

クエスチョンマークを頭の上にくっつか浮かべながらレベッカはへにやりと眉尻を下げた。

「ああ、ごめんごめん。 今ね、使者様の護衛担当にリントン先輩がついているから話が聞けないかなあと思って」

初耳だ。 そうか、そんな重要な役割を担っている最中だとは。

確かに今週に入ってからウィリアム様に会っていないな、とレベッカは思った。

「ウィリアム様はお仕事の話を私になさることは殆どありませんから、お役に立てそうにありませんね……ごめんなさい」

ぺこりと頭を下げる。

慌てたのは学友たちのほうであつた。

「わ、こちらがごめんだよ！ 困らせたり謝らせたりしたかったわけじゃないんだ」

「ただちよつと、使者様の個人情報がかつたら嬉しいなあと思つて」

「ふむ、ちなみにどんなことが知りたいのかな」

タイミング良く合の手が入る。通りの良い女性の声だ。

「誕生日だろ、それから好きなもの苦手なもの、好みの異性のタイプなんてのも分かるといいなあ！」

答えるほうはそのまま指を折って知りたいことを数え上げる。

「……なんだそれは……全く政治的な意味合いが見受けられないな。一体何に使う情報なのかな？」

「各国美美女データブックを作るんだよ！ 憧れのあの人はどんな人？ なーんてオビも付けて売ればおこづかい稼ぎになる、かもしれない！ ちなみにリントン先輩のデータは収集済みだぞ、先輩の好みのタイプはもちろんレ、」

そこまで喋ったところで、べしりと熱く語る人物の顔面に何かか飛んできて、あやしげな事業計画は途中で止められた。ぼとり、とその「何か」が足元に落ちる。

「……近衛の制帽……？ ってリントン先輩ー！ と使者様ー！？」

少々口元を引きつらせながらウィリアムが現れた。傍には赤毛の美女を伴って。

「先輩と呼ばれるからには君たちは私の後輩になるわけだけど、今、ものすごく無関係のふりをしたいよ私は。あまり山っ気を出しておかしたことをするのはやめなさい。他国の客人がいらしている時期には特に」

「ふふふ、そう目くじらをたてるようなことでもないでしょう、リントン」

「フローレ殿」

艶やかに笑う女性にウィリアムはわずかに眉をひそめる。が、彼女は全く気にした様子もなく学生たちに向き合った。

「たまたま歩いていたら話が聞こえてきたのだけれど、結果的に立ち聞きのような形になってしまい申し訳ない。

ご存知のようではあるけれども私はフローレ・プラネタ。プラネタから来た親善大使だよ。一応プラネタ王国の第二王女と言う肩書もあるね。ちなみに、好きなタイプは一途な人だ」

パチン、とウィンクをして微笑む。

学生たちはうわあ、と顔を赤らめながら順に自己紹介を始めた。それらを横にレベツカは、

(……ヒューバート殿下と話が合いそうなかただわ)

ウィンクを見てそんなことを考えていた。

## 12 赤い髪の麗人（後書き）

ところで、ほらふき貴族シリーズとして

ほらふき公爵・ほらふき侯爵・ほらふき伯爵・ほらふき子爵・ほらふき男爵

と並べた場合に、ほらふき子爵が一番スティックな感じがしてちょっとウキウキしてしまいます。

ほらをふいている時点でスティックも何もないんですけれど。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9257p/>

---

理想のタイプはお義父さま

2011年9月5日09時47分発行